

認定心理士の会から

運営新体制のご挨拶とお願い

認定心理士の会運営委員会は、2021年10月1日よりメンバーが入れ替わり、第3期委員会がスタートしました。委員10名のうち7名が、新規メンバーとなります。どうぞよろしく申し上げます。

前委員長との引き継ぎを行った際、「(認定心理士の会の)屋台骨は組みましたから、あとはお願いします」と言われました。いやいや、屋台骨どころか、外壁も内装もほぼ仕上がってるじゃないですか……。ご承知の通り、認定心理士の会は2016年4月に発足して以降、地域ごとのシンポジウムやイベントの開催、オンライン交流会、シチズン・サイエンスプロジェクト、社会連携セクション、シチズン・サイコロジスト奨励賞など、新しい取り組みを次々に行ってきました。今後、この会をどう運営していくか、プレッシャーを感じています。

ちょっと考えて、今後の基本方針を「現状維持」と決めました。上記の事業を、今後も継続していきます。ただし、引き継ぎの過程で何らかの問題が見つかったり、運営側の負担が大きいと感じる事業に関しては、見直しを凶らせていただきます。運営委員が交代しても、無理なく持続できる体制を構築していきます。前述の家屋の例に戻ると、管理人が変わっても長く住める家を目指します(←例えになってます?)。

認定心理士の皆様には、引き続き、認定心理士の会へのご参加、ご協力を、よろしく申し上げます。ご承知の通り、昨年度以降、イベントがすべてオンライン開催となっています。オンラインはちょっと……という方も、一度、参加してみてください。きっと、すぐ慣れます。今はオンラインで、学びと交流を続けていきましょう。そして近い将来、対面のイベントが復活する日を待ちましょう!

(認定心理士の会運営委員会委員長 渡邊伸行)

若手の会から

拠り所となる若手の会を目指して

若手の会の門戸を叩いたのは、第79回大会で卒論の内容を発表した際に案内のポスターを見たのがきっかけでした。今年度幹事となり、初めてこのコーナーを執筆させていただくにあたり、過去のこのコーナー・若手の会のこれまでの歩みを振り返ったところ、若手の会の設立はそのほんの数年前であったということを知り、学生時代のあの時にこの会に出会えて良かったとほっとしています。そうでなければ、自分の研究者としてのアイデンティティは今と少し変わっていたかもしれない! と思います。

私は学生時代、学際的なアプローチで社会問題の解決を検討する専攻の中で心理学を学びました。合意形成、行動変容、施策の公共受容に関する研究も多く、政策課題と心理学の関係は深くなっているように感じますし、実務からも心理学の貢献に対する期待も年々高まっていると感じています。心理学に限らず、学際化、リ

ベラルーツ教育の促進、文理融合型の学部の創設も進んでおり、大学教育における異分野融合の重要性については言を俟たないものとして認識されていると思います。

一方で、学位取得や研究者としてのキャリア形成においては、どこかの段階で自分の専門について自覚的になり、伝統的な学問体系の中に位置づける必要がある場面があります。そうした際に、特に学際的な学部出身者は「自分の専門は何か」という問題に直面することから、実際に学生から相談をうけることも多くあります。

文理融合、学問領域の再統合の流れの中で、こうした悩める学生も今後増えるように思います。そんな時に、学会コミュニティへの所属は、学問分野への帰属意識を持つきっかけとなることを、自身の経験を通じて実感しているからこそ、心理学徒として究めることを志す若手の拠り所となる場、異分野融合による学びの創発を促す場を作っていきたいと思っています。

(若手の会幹事 讀井知)